

精神疾患は自然種か

後藤, 真理子
九州大学大学院 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/4150379>

出版情報 : 哲学論文集. 56, pp.19-39, 2020-12-15. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :

精神疾患は自然種か

後藤 真理子

本稿の目的は精神疾患が自然種か否かという点について論じることにある。

一九六〇年代に興った反精神医学の運動の中で、精神疾患の实在性に疑問を投げかける「精神疾患は自然のうちに実在するか」という問題が提出された。この問題は精神疾患が自然のうちに実在するものなのか、我々や社会によって作り出された規約的なものなのかという論点を生み出した。

だが、アメリカ精神医学会による『精神疾患の診断・統計マニュアル』の改訂3版（通称DSM-III）の登場、生物学的アプローチの増加、新薬の開発といった流れの中で、「精神疾患は自然のうちに実在するか」という問題についての議論は下火となっていく。しかし、神経医学的アプローチによって精神疾患の特異性が判明した現在、「精神疾患は自然のうちに実在するか」という根本的な問いかけについて再考することは意義深いことであるように思われる。

この精神疾患の实在に関する問題について考えるひとつの手法は、精神疾患は自然種なのかと問うことであろう。仮に精神疾患が自然種でないならば、精神疾患は自然のうちに実在しない規約的なものであるという反实在論的な結論に至る。それゆえ、本稿では、精神疾患が自然のうちに実在するかという問題について論じるための準備として、精神疾患を自然種

であるとする立場について吟味する。

本稿の構成は以下の通りである。まず第一章では現代精神医学の研究によって判明した精神疾患の特異性について説明し、第二章では伝統的本質主義的なアプローチについての説明を行い、精神疾患が伝統的本質主義的な自然種ではないことを確認する。続く第三章では恒常的性質クラスター (homeostatic property cluster, HPC) 説の概説および H・ビービー達による精神疾患は HPC 種であるという主張の概説を行う。そして第四章では精神疾患が HPC 種であるという主張に対する批判を行い、精神疾患が HPC 的な自然種でもないことを確認する。

1. 現代精神医学の観点から

イギリス精神医学界の重鎮である R・E・ケンデル達 (1980) は、分類とは「自然をその継ぎ目に沿って切り分ける (carving nature at the joints)」ための技術であり、また精神医学における疾患単位 (entity) という語が「問題となる状態とその近接〔した状態〕との間の自然な境界または不連続の存在を意味する」と述べた。¹⁾これは、精神疾患に関する統計を取った際、線形変数上の分布がひとつの山だけを持つ単峰性ではなく、中央に希少点 (point of rarity) を持つ二峰性でなくてはならないということを意味している (図1参照)。この希少点という語は微生物学者である P・H・A・スヌース (1957) によって用いられ始めた語である。生物分布には特徴の組み合わせが非常に稀な点である希少点が存在している (例えばカモノハシは哺乳類、鳥類、爬虫類の間の希少点である)。生物分類について考える際、スヌースは分類の境界線をこの希少点に置くことを提案した。²⁾スヌースはこの

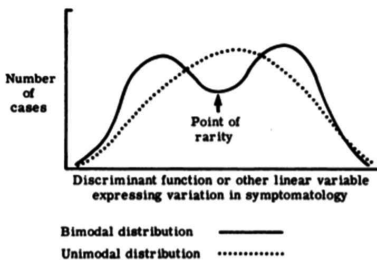


図1 (Kendell, Brockington(1980), P. 325.)

希少点があるからこそ分類することに意味があり、希少点がないのならば分類には意味がないと述べる。この希少点を境にして線形変数上の分布が二つの山を持つことを二峰性と表現し、この二峰性はその分布に異なる二つの集団が存在していることを示す。つまり、希少点を境にして二峰性が出現した場合、それぞれの山を別個の精神疾患として分類するということになる。この希少点という概念は精神医学においても受け入れられており、ケンデル達は統合失調症と感情精神病の間に希少点が見当たらず、自然な境界を見出すことができなかったと報告している。

このケンデル達による報告の原因が判明し始めたのは二〇〇〇年代に入ってからである。大規模な遺伝子研究の結果、精神疾患に関連するとされる多くの遺伝子異常が複数の主要な精神疾患で重複して観察されるということが判明した^③。この精神疾患の持つ性質をMultifinal性と言う。同時に、例えば統合失調症といった同一カテゴリーに属すると思われる個々の病状が表面上似通った表現型を示すとしても、それらの背景にある生物学的基盤は異なっている可能性があることも明らかになってきた。この性質はEquifinal性と呼ばれ、現代精神医学において個々の精神疾患はMultifinal性またはEquifinal性を持つと措定されている(図2参照)。このような特異な性質を背景として精神疾患は発病するのだが、精神疾患の発病過程は静的要因としての脆弱性と動的要因である環境誘因の複雑な相互作用によって説明され、またこの両者は必ずしも独立した因子ではない^④。この点について、黒木(2019)は以下のように述べている。「……個人の遺伝子がその行動様式に影響を与え、それが環境に作用してストレスフルな状況を作り出し、その状況に対する脆弱性にもまた遺伝子が関与して最終的に精神疾患が発病するといった極めて入り組んだ経路をたどることが分かってきた。伝統的な精神医学の病因論が想定してきた内因(遺伝子)と心因(環境)が、相互に独立した関係にあるとは必ずしも言えないのである。」^⑤つまり、精神疾患の持つMultifinal性とEquifinal性は、生物学的基盤としての遺

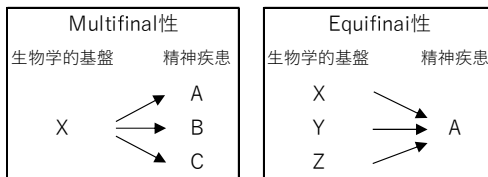


図2 (国里、片平、沖村、山下(2019)、p.9.を参考に作成)

伝子と環境との非常に複雑な相互作用によって説明されると言えるだろう。

さて、ケンデル達による別個の精神疾患の間に自然境界線が見いだせなかったという研究報告は、それらが同一の病因関連連遺伝子を持つという *Multifactorial* 性を有していたことに起因すると考えられる⁶⁾。つまり、統合失調症と感情精神病は同一の病因関連連遺伝子を持つているため、統計をとつてもその両者間に差異を見出すことができなかったと解釈される。また、これらの研究により、診療判断の根拠となる客観的・定量的生物学的指標であるバイオマーカーが精神疾患においては殆ど存在しないということもまた明らかとなつてきた。分子生物学や神経生物学からのアプローチはこのバイオマーカーの不在という問題を乗り越えるために行われたのだが、そこで明らかとなつたのは身体疾患と比較した時の精神疾患の著しい異種性であつた⁷⁾。

以上のことは、精神疾患が「自然な境界または不連続の存在」を意味するところの存在者ではないということを示唆している。これらの研究は主要な精神疾患の相互が漸次的に移行し、自然境界線あるいは希少点が認められないということを示唆しており、従来のな諸々の精神疾患が独立したカテゴリーであるという認識に疑問を投げかけるものであつた⁸⁾。この研究結果は、今までの精神疾患に関する分類が恣意的なものであるという結論を容易に導き出すものである。P・ザッカー(2000)は以下のように述べる。「もしも或るカテゴリーが自然種として概念化されえないのなら、それは恣意的なカテゴリーである。」自然種の実在論によれば自然種概念とは世界のうちに既に存在しているものであり、我々はその自然種概念に合わせてカテゴリーを行う。つまり、「自然種として概念化される」とは、自然種に従つた分類が我々の利害・関心によって取り決められているものではなく、実際に世界の側に存在している分割に従つて分類がなされるということを意味する。この時、仮に精神疾患の分類が我々の利害・関心のみによるカテゴリーの結果ならば、それは我々によって作り出されたものであり、自然のうちに実在しない存在者であるということになる。ゆえに、以上の研究結果は精神疾患の存在論的身分に関する議論に大きな影響を与えるものだろう。なぜなら、もし精神疾患が連続的なものであり、それゆえにそれ自身において明確

な区切りを有していないならば、我々の精神疾患の分類は利害・関心のみに応じた恣意的なカテゴリーライズであるということになり、各精神疾患は自然種ではなく規約種であるという反実在論的な結論に至るからである。

ここで我々が問うべきなのは「精神疾患は自然種なのか」という問いである。しかし、自然種という語の定義は多義的であり、一義的に決定することが難しい。それゆえ、本稿では伝統的本質主義およびHPC説による二つの自然種の定義を取り上げ、それぞれの説について吟味したい。

2. 伝統的本質主義の観点から

2-1. 伝統的本質主義における精神疾患

本章では伝統的本質主義を取り上げる。まず伝統的本質主義に則った自然種の説明を行い、精神疾患が伝統的本質主義的な意味での自然種であると言われる時、どのような説明がなされるのかの確認を行う。

伝統的本質主義によれば、同一の自然種の外延である存在者は、すべて同一の内在的本質を有しているとされる。ここで本質は以下の二つの役割を果たす。

ひとつは自然種の成員を決定するという役割である。例えば、或る存在者が「金」という自然種に属するためには、その存在者が原子番号79の原子構造（すなわち内部の微細構造）という内在的本質を持つことが必要十分条件となる。本質の二つ目の役割は、種の成員によって持たれる他の性質を決定することである。この時、金が延性や1064°Cで溶解するという性質を持つのは、原子番号79という本質を有することの帰結として考えられる。以上の二点をまとめ、N・ハスラム(2014)は、伝統的な本質主義的文脈での自然種はそのカテゴリーに属するすべての成員に共通しており、また直接的に種の性質を生じさせる単一の原因である本質を基礎とすると述べる。そして、この本質の存在によって我々は「自然をその継ぎ目に沿っ

て切り分ける」ことが可能になる。本質の差異が「継ぎ目」となるのであり、我々はその「継ぎ目」に沿って分類を行うことができるようになる。

また、伝統的本質主義では帰納的一般化の基礎に自然種の存在があると考ええる。伝統的本質主義は、本質の存在によって科学的な帰納的一般化および法則的言明の記述が可能になるといふ科学的本質主義の立場を採る。換言するならば、或る種の成員が同一の本質を有しているということが、科学的な帰納的一般化と一定の法則的言明の記述を支えているということになる。金の例を用いるならば、金が原子番号79という本質を持つているからこそ、「金は延性を持つ」や「金は1064℃で溶解する」といふ金についての法則的言明の記述と帰納的一般化が可能となる。

では、伝統的本質主義は精神疾患についてどのような説明を行うのか。ハスラムによれば、或る精神疾患に罹患しているすべての人々が特定の要因（遺伝子の変異や特定の脳の変調などが挙げられる）という内在的本質を共有しており、その本質が症状の因果的な原因であると特定されたならば、精神疾患は伝統的本質主義的な自然種であると認められる。この時、別個の精神疾患がそれぞれ異なる症状を有するのは、遺伝的機能不全がそれぞれの精神疾患によって異なることに起因すると考えられる。例えば統合失調症と大うつ病性障害の症状が異なるのは、本質である単一の遺伝的機能不全が異なるためだといふ説明を行うことができる。

また、分類については、個々の精神疾患によって異なる遺伝的機能不全を「継ぎ目」として精神疾患の分類が行われると説明される。つまり、各々の精神疾患はそれぞれ別の単一の本質を有しており、その本質があるからこそ個々の精神疾患を異なる疾患として分類することが可能になるのだ。以上のことから、精神疾患が伝統的本質主義的な意味での自然種である場合、遺伝的機能不全という単一かつ同一の本質が原因となり精神疾患の諸症状が生じ、また本質があるために帰納的一般化や分類が可能になると言えるだろう。

212. 伝統的本質主義への批判

さて、精神疾患は本当に伝統的本質主義的な自然種なのか。

前節で見た通り、精神疾患が伝統的本質主義的な意味での自然種であるなら、或る精神疾患が単一の本質を有しており、精神疾患の罹患者はその単一の本質を共有していることになる。だが、この点は現在の分子遺伝学から否定されている。主要な精神疾患のほとんどすべてにおいて遺伝要因の関与が示唆されていることは確かだが、精神疾患の遺伝的要因について現在重要視されているのは個人の遺伝子の差異である。実際、分子遺伝学においては、一塩基多型（個人の遺伝情報のわずかな違いのこと）や点変異（片方の親の生殖細胞における突然変異によって或る人から突然見られるようになる遺伝子変異のこと）に焦点を当て、精神疾患の遺伝についての研究が行われている。また、分子遺伝学の研究が進むにつれ、精神疾患が遺伝的要因について多くの因子の絡みあう複雑疾患であることが判明してきた。これらの研究結果は、個々の疾患を単一のファクターにより分類することの不可能さを示している。^⑤このことは、各精神疾患が同一かつ単一の本質として遺伝的機能不全を有しているとする伝統的本質主義に不利に働く。なぜなら、精神疾患の遺伝的要因は単一のものではなく、また個人の間の遺伝的差異が重要視されていることから分かるように、或る精神疾患の罹患者の全員が共有している単一の遺伝的機能不全は存在しないと考えられるからだ。

また、本稿第一章で見た精神疾患の Multinial 性および Equinial 性から、精神疾患の種別について伝統的本質主義的な説明を採ることは難しい。伝統的本質主義を採る場合、それぞれの精神疾患は他とは異なる単一の本質を有しており、精神疾患の罹患者は全員その本質を共有していなければならない。しかし、仮に X という遺伝的機能不全から複数の精神疾患が生じる、或いは X、Y、Z といった複数の遺伝的機能不全からひとつの精神疾患が生じるのならば、同一かつ単一の本質を個々の精神疾患のすべての成員が共有すると考えることはできないし、それゆえ本質によって自然種の成員を決定することもまたできない。以上のことから、伝統的本質主義による説明と Multinial 性および Equinial 性とはかみ合わないように思われる。

最後に、伝統的本質主義を採る場合、各精神疾患の本質は何らかの遺伝的機能不全であり、それによって個々の症状が生じるということになるのだが、このような単純な生物学的還元による精神疾患の病態に関する説明を行うことができないという問題がある。本稿第一章で触れた通り、精神疾患の発病機序においては内因である遺伝子と外因である環境が深く関わり合い、相互に影響し合うことが確認されている。このことから、遺伝的機能不全を単一の本質とし、それによって精神疾患の諸症状が生じるとする伝統的本質主義を採用することはできない。

以上のことから、本稿では精神疾患を伝統的本質主義的な自然種ではないと結論づける。

3. 新しい本質主義の観点から

3-1. 恒常的性質クラスター説

前章では、精神疾患を伝統的本質主義的な自然種とすることの困難を見た。では、他の立場はどうか。本章では、R・ポイドによる恒常的性質クラスター（HPC）説を取り上げたい。

ポイドによれば、我々が自然種の理論に取り組む時「分類という実践とその言語的表出が、科学的な（かつ日常的な）帰納的／説明的実践の確実性を裏付けるのにどのように役立つのか」ということが根本的な問いとなる。¹⁰ この問いへの回答として、ポイドは或る学問分野における推論の実践（概して帰納や科学的な説明および予測）と世界の因果構造との一致を挙げている。例えば、我々は「H₂O」を水種の定義であると考える。この時、我々が水という種名辞を用いるのは、まず近似した物質をひとまとまりにするためである（この時点では種の成員は単なる恣意的な規定あるいは言語的規約によってまとめられていただけである）。そして、その次にそれが世界の因果構造を反映しているかどうかを確かめることによって、その分類は帰納的／説明的実践を裏付けることのできる正当なものとなる。¹¹

この上でポイドはHPC説を提唱したのだが、具体的にHPC説はどのような特徴を持っているのか。植原(2013)は、HPC説の特徴を(1)性質群の恒常性、(2)帰納的一般化の成立、(3)メカニズムの存在という三点にまとめ、説明を行っている。以下ではこの植原による説明を援用しつつ、HPC説について説明する。

(1) 性質群の恒常性

伝統的本質主義は、その種のすべての成員によつて共有される単一の内在的本質に訴えることで自然種の説明を行う。だが、生物学の哲学ではこの伝統的本質主義は「死んだ」立場であると見なされている。何故なら、進化論を事実として受け止める時、特定の生物種に属する成員のみが共有する内在的本質は存在しないと考えられるからだ。例えば、同一種の進化について考える時、進化の過程において内部の微細構造は変化していく。つまり、その種の成員は内在的本質を変化させていくと考えられるのである。このような進化論との齟齬により「死んだ」本質主義を違う形で復興させたのが「新しい本質主義」と呼ばれる立場であり、ポイドによるHPC説もそのうちのひとつであるとされる。

ポイドは恒常的に維持される性質のクラスター化という点から自然種について説明している。HPC説によれば、自然種は単一の内在的本質を持つのではなく、それに特徴的な性質の一群を有する。これらの性質群はいつでも必然的に生じるのではなく、性質群が一定の安定性を持ち、「恒常性」と呼べるようなまとまり方をして現れる。つまり、この性質群は単なる寄せ集めではなく、外部の変化に耐えうるような安定したひとまとまりをなしているのである。¹²⁾

この性質のクラスターには特定の自然種に属する個別者が必ず持たなくてはならない性質は存在しないが、その自然種に属する個別者はクラスターの中の性質のいくつかを有してはならない。例えば、Sという自然種名辞が性質クラスターCによつて定義されると仮定する(このCは P_1, \dots, P_n というn個の性質から構成されている)¹³⁾。或る成員 M_1 が性質 P_1, P_2, P_3 を持ち、別の成員 M_2 が性質 P_4, P_5, P_6 を持つと想定する時、 M_1 と M_2 は共通の性質を持っていないことになる。こ

のとき、伝統的本質主義を採るならば M_1 と M_2 には同一の自然種名辞 S が適用されない。何故ならば、 M_1 と M_2 はひとつの内在的本質を共有していないからだ。だがHPC説を採る時、 M_1 と M_2 には同じ自然種名辞 S が適用される。というのも、HPC説は異なる存在者が共通した性質を有していなかったとしても、クラスター内のいくつかの性質を有しているならば同一の種に属していると考えられるためである。それゆえに、伝統的本質主義と比較する時、HPCとしての自然種はより曖昧で不確定な外延を有することになる。この曖昧さが、先に述べた生物種に関する説明を可能にする。HPC説を採る場合、同一種内の進化において成員が持つ性質が少しずつ変化していき最終的に全く異なる性質を持つようになったとしても、成員がクラスター内のいくつかの性質を持っているならばそれらが同一種の成員であると認めることができる。以上から、HPC説の持つ曖昧さは敢えて措置されているものと見なすことができよう。

(2) 帰納的一般化の成立

HPC説では、恒常的性質クラスターに含まれる諸性質について、帰納的一般化や因果的予測が成立するとされる。例えば、金については「金は 1063°C で溶解するという性質を持つ」という帰納的一般化あるいは法則的一般化が成立し、それによつて金が 1064°C で溶解するという因果的予測を立てることが可能となる。生物種についても同様である。生物種の場合、例えばアルピノのようなその種の典型的性質を持たない個体が存在するために例外のない帰納的一般化は不可能であるものの、数多くの帰納的一般化や因果的予測を行うことができる。例えば、人間に関して「人間は二足歩行である」という帰納的一般化を行うことは可能だろう。

この恒常的性質クラスターに含まれる個々の性質に関する帰納的一般化と(1)で見た性質群の恒常性の違いについて、植原は「帰納的一般化の成立というこの第二の条件は、恒常的性質群としての自然種がもつ個々の性質に力点が置かれている」が、「性質群の恒常性という第一の条件では、そうした個々の性質ではなく、性質が全体として安定したひとまとまりを

なしている」と述べている。¹⁴つまり、(1)は諸性質が恒常的なクラスターとしてまとまっているというHPC説の特徴について記述している一方で、(2)ではクラスター内の諸性質について帰納的一般化が成り立つという特徴を記述しているのである。

(3) メカニズムの存在

では、以上の恒常性と帰納的一般化を成立させているのは何なのか。HPC説によると、クラスターを構成する性質を恒常的に引き起こす因果的メカニズムがこの世界には備わっており、そのために或る個別者がクラスターを構成する性質のいずれかを持つことは、その個別者がそのクラスター内の他の性質を持つ確率を高めることになる。¹⁵この時重要なのは、この因果的メカニズムには内的要因だけでなく外的要因も含まれうるということだ。例えば、猫は四本脚であること、二つの目を持つこと、尾があることなどの典型的な特徴を有している。この猫の典型的特徴は内的要因のみによって生じたものではない。それ等は進化の過程で生じたものだからだ。このとき、猫の典型的特徴の生起に関する説明には環境圧のような外的要因が必要不可欠である。これは、遺伝という内的要因と環境圧という外的要因からなる因果的メカニズムの存在が何らかの性質を猫の恒常的な特徴とする原因となっているためである。このように、HPC説は、伝統的本質主義では含むことのできなかつた外的要因を因果的メカニズムの中に組み込むことができる。それゆえに、HPC説では伝統的本質主義では説明しきれなかつた部分についての説明が可能となる。

また、この因果的メカニズムの存在により、自然種に関する帰納的一般化は偶然成り立つものではないと言える。HPC説によれば、自然種を定義する性質クラスターの統合は因果的なものである。ポイドは一九九一年の論文で、自然種の定義が世界の因果的構造に準拠しなくてはならないという点を強調し、帰納と説明を達成するためには常に我々のカテゴリーを世界の因果構造に一致させることが必要であると述べる。¹⁶この時、自然種の持つ諸性質についての帰納的一般化や因果的予

測が成立するのは、その基礎に因果的メカニズムが存在するからだと考えられる。

以上の三つの特徴によってHPC説は説明される。このHPC説と第二章で見た伝統的本質主義の自然種観は、以下の点で異なっている。

まず、本稿第二章で見た通り、伝統的本質主義では本質を内的な微細構造としていた。HPC説は本質をそのように規定するのではなく、世界の側に存在する因果的メカニズムとして捉え直している。この因果的メカニズムに求められるのは、自然種に関する帰納的一般化を成立させ、性質クラスターを出現させることだけである。それゆえ、この因果的メカニズムは内部の微細構造という内的要因ではなく、環境圧といった外的要因もまた含むことができる。

次に、伝統的本質主義では、或る存在者が特定の自然種に属する際、その存在者が内的な本質を持つことが必要十分条件となるのだが、HPC説ではこのような内的本質と自然種帰属の密接な繋がりが求められない。なぜなら、先に述べたようにHPC説では内的要因だけでなく、外的要因もその因果的メカニズムに含むことができるからである。以上から、HPC説は伝統的本質主義よりも緩やかで柔軟な自然種観を有すると述べることができるだろう。

3-2. HPC種としての精神疾患

では精神疾患はHPC説における自然種なのか。ビービー達(2010a)はHPC説を採る時、少なくともいくつかの精神疾患が自然種だと主張できるとする。

ボイドのHPC説に則って精神疾患を自然種と見なす時に重要なのは、「精神疾患種が世界の因果構造に一致し、それにより推論の実践を生み出すことができるかどうか」である。¹⁷ ビービー達はこの点について、「少なくとも原理的に」という慎重な表現をしているもの(可能だとする。確かに実際に個々の精神疾患種は推論の実践において正当な役割を果たしてい

る。例えば、目の前の人間が或る特定の精神疾患に罹患していると知っている人間は、その目の前の人間が今後取りがちな行為はどのようなものか、どのような予後をとるのか、そしてどの程度治療が成功する可能性があるかといった多くの推論を行うことができる。勿論、この推論は物理学における推論と異なり確実性の劣るものである。この点については生物学もまた同様である。例えば何かが猫であるということは、その何かが四本脚であることや尾を持つことなどを保証しない。しかし、これらの猫の特徴は遺伝や環境圧のような因果的メカニズムによって恒常性を有し、猫の典型的特徴となる。以上の点が精神疾患種にも当てはまる。確かに精神疾患の罹患者に関する確実な推論を行うことはできないが、生物学と同様、或る程度確からしい推論を行うことは可能である。この点については、精神医学の実践における推論が統計的処理によってある程度担保されているということを述べる必要があるだろう。精神医学においては、医療実践者の推論が個人々の思い込みによって歪められることがないよう、研究場面および臨床場面のフィードバックを収集し、それに関する統計的処理の精度を上げ続けている。この統計的処理の結果を用いることにより、臨床場面での推論は精度を増していく。勿論、これは医療実践者の推論が因果構造に完全に一致するということは意味しない。だが、このことから医療実践者の推論が現実の因果構造に或る程度一致すると述べることは可能である。

さて、この時間問題となるのは、様々な症状をもたらす因果的メカニズムが精神疾患に存在するのかわかっている点である。殆どの精神疾患の病因は現状明確に特定できておらず、また患者によって病因が遺伝的にも環境的にも異なるとされる。このようなか中で精神疾患の因果的メカニズムを指定することは果たして可能なのか。

この点について、ビービー達は症状をもたらす様々な因果的基礎（神経学的、発達の、遺伝的、化学的な基礎）が考えられ、これらの因果的基礎自体は患者によって異なることを認めている。しかし、仮に同一の疾患に罹患している患者間に因果関係の差異があったとしても、その患者達がとる行動、予後、治療に大きな差異がない限り、その因果関係の差異は問題とならない。というのも、HPC説は基礎的因果関係の同一性を自然種の要件として求めているからである。また、精神

疾患の因果的基礎を生物学的な基礎に限定する必要はない。事実、ボイド (2010) は HPC 説が一部の社会種 (social kind) についても説明を行うことができると述べている。社会種とはジェンダーや貨幣、人種といった我々の心的活動に依存して存在する種のことであり、我々の心的活動や関心ないしは社会的実践によって作られているという点で、自然種と区別されるのが一般的である。この時、その発病機序に社会・文化的環境が含まれている精神疾患も社会種であると考えられることができる。HPC 説によると自然種の重要な特徴は恒常性を発揮させる因果的メカニズムによって支えられている点にあるが、この見解は社会種を排除するものではない。社会種もまた世界の因果的メカニズムによって支えられている場合があるからだ。例えば、貨幣は単なる規約種名辞ではないとされる。なぜなら、貨幣の場合その因果構造が社会的な実践の産物であるという事実があるものの、それ自体は世界の因果構造に一致しているからである¹⁸。この時、貨幣種は HPC 的な自然種であると考えられる。HPC 説において、或るカテゴリーが因果的メカニズムと一致し、それにより帰納的一般化が行われ推論が可能となり、恒常的な性質群が存在するならば、そのカテゴリーは自然種であると見なされる。つまり、社会種においても、因果的メカニズムとカテゴリーの一致がなされ、それによって帰納的一般化やその社会種に関する推論が可能ならば、その社会種を HPC 的な自然種と見なすことが可能なのである。ゆえに、貨幣種もまた自然種であると述べることができる。以上から、各精神疾患の因果的メカニズムにおいて社会的要因が重要な役割を果たしているという事実は、いくつかの精神疾患が自然種であるという主張を決定的に妨げるものではないとビービー達は結論づける。

精神疾患を HPC 的な自然種とする見解は、本稿第二章で見た伝統的本質主義による説明よりも妥当であるのは間違いない。例えば、本稿第二章で見た通り、伝統的本質主義では精神疾患の持つ性質である Multifinal 性および Equifinal 性を説明できないが、HPC 説を採るならばこの二つの性質について説明可能であるように思われる。Multifinal 性については、A、B、C という個々の精神疾患の性質クラスターを生じさせる因果的基礎に X という生物学的な基礎と個々の異なる環境という社会的要因が存在すると考えることができるし、Equifinal 性についても A という精神疾患の性質クラスターを生じさせる

因果的基礎が個々の患者において異なっているだけだと述べることは可能だろう。

4. 精神疾患はHPC種なのか

しかし、少なくともいくつかの精神疾患をHPC的な自然種であると考えることには問題があるように思われる。

まず、本稿第一章で触れた希少点の問題がある。HPC説は確かに自然種の成員が単一の本質的な性質を共有することを求めない点、そして個々の種の間にはつきりとした境界を要請しないという点から従来の伝統的自然種観に比べ寛大な説であるが、それでもなおそれぞれの種がひとつの種であると見なされるためには希少点の存在が必要不可欠である。第一章で見たように、希少点を境として現れる二峰性はその分布に異なる二つの集団が存在していることを示すからである。つまり、希少点がなければ二峰性は現れず、線形変数上に存在する二つの山を別の種として分類することはできなくなる。この時、HPC説が例えば個々の種の中に明確な境界を要請しないとしても、隣接する自然種をそれぞれ別の種として分類することから、HPC説もまた個々の自然種の中に希少点があることを前提にしていると考えられる。だが、すでに本稿第一章で述べた通り、現代の神経生物学的研究は主要な精神疾患の相互が漸次的に移行し自然境界線となる希少点が認められないという点、また正常との間も同様であるという観点を提出している。つまり、現在の神経生物学の研究で示唆されているのは、各精神疾患間および精神疾患と正常との間にはそもそも境界が存在しない可能性が高いということである。この神経生物学の研究結果を正面から受け入れる時、例えばHPC説が伝統的本質主義よりも曖昧な境界を想定しているとしても、精神疾患はそのHPC説の想定を超えたまさに「連続的な」存在者であるということになり、HPC説ではその存在様態を捉えきれないという結論に至る。

第二に、HPC説を採用する場合、精神疾患である状態とそうではない状態の区別をつけることができない。例として死別反

応（親しい他者を喪失した個人の反応のこと）を取り上げる。死別反応は基本的に精神疾患とは考えられていない。しかし、アメリカ精神医学会（American Psychiatric Association, APA）はうつ病／大うつ病性障害の項目で以下のように述べている（なお訳出については日本語版のDSM-5を用いた⁽¹⁾）。「これらの症状（筆者注：死別反応における抑うつエピソードと類似した症状）は、喪失に際し生じることが理解可能で、適切なものかもしれないが、重大な喪失に対する正常な反応に加えて、抑うつエピソードの存在も入念に検討すべきである。その決定には、喪失についてどのように苦痛を表現するかという点に関して、各個人の生活史や文化的規範に基づいて、臨床的な判断を執行することが不可欠である」。この記述からわかるのは、正常な悲嘆である死別反応とうつ病は共有する性質が多いということだ。さて、HPC説を採る場合、うつ病の性質クラスト（強い悲しみ、喪失の反芻、不眠、食欲不振、体重減少…）のうちの多くの性質を死別反応も共有していることになり、この時死別反応もうつ病種であると見なされることになる。だが、上記した通り、死別反応は正常な反応であり精神疾患ではない。またこの時、死別反応とうつ病の因果的メカニズムの差異に訴えることもできない。なぜなら、HPC説では個々の患者の因果的基礎の差異が認められているからだ。それゆえに、死別反応とうつ病を区別するためには医師の主観的判断という別の判断基準が必要となる。以上から、HPC説だけでは精神疾患と正常な反応の区別をつけることができないと考えられる。

最後に、HPC説は現実にとどの精神疾患分類を選択すべきなのかという点について説明できない。ザッカー（2015）は、精神疾患の種別問題について考える時、HPC説が伝統的本質主義に比べ妥当であると評価するものの、HPC説は我々が「よい」分類を選択する際に存在する仮定や目的について説明できないと批判している。実際に精神疾患分類が行われる際、因果的メカニズムという観点だけから行われていないことは明らかである。例えば、一九六〇年代まで同性愛は社会病質パーソナリティ障害（DSM-I）あるいは人格障害（DSM-II）と見なされていたが、APAは一九七三年に同性愛を精神疾患とする見解を取り下げ、翌年に出版されたDSM-II第7版において同性愛は精神疾患分類から除外された。この決定

の背景には、同性愛者解放運動に関与してきた活動家達によるAPAへの働きかけがあった²⁰。この精神医学における同性愛の取り扱いの歴史からも分かるように、我々はビービー達の主張するような何らかの因果的基礎に基づいた分類を機械的に行うだけではなく、その分類が与える社会的な影響や社会的規範も考慮して精神疾患の分類を行う必要がある。ザッカーは、精神疾患分類が統計学や生物学的なアプローチだけではなく、例えばステイグマを減らすといったような我々の目的や関心にも従っていると指摘し、HPC説ではその我々が目指すべき「よい」分類についてカバーできないと述べる。HPC説を採る場合、社会種を自然種として説明可能であるとポイドは述べるが、少なくとも精神疾患種に関する説明に関しては、我々の目的や関心から精神疾患を完全に切り離し、世界の因果構造と一致し法則的一般化が成り立つという観点のみから行われるべきではないのだ。

以上のように、HPC説は精神疾患の存在様態を部分的に説明できているものの、それを正確に捉えきれていないように思われる。それゆえに、精神疾患はHPC的な自然種ではないと本稿では結論づける。

おわりに

本稿では、「精神疾患は自然のうち実在するのか」という問いに向かうための準備として、伝統的本質主義とHPC説による自然種の説明を取り上げ、精神疾患が自然種であるかどうかについて検討した。伝統的本質主義的な自然種の説明によれば、自然種は単一の内在的本質を持っており、また自然種の成員は全員その単一の内在的本質を共有していなければならぬ。しかし、精神疾患は単一の内在的本質を有しておらず、またその外延に属する存在者はそのような本質を共有していない。対して、HPC説は(1)性質群の恒常性、(2)帰納的一般化の成立、(3)メカニズムの存在という3つの特徴を有しており、伝統的本質主義よりも緩やかな自然種観を持っている。だが、精神疾患をHPC的な自然種と見なす場合、希

少点の問題、精神疾患と正常な反応の判別の困難さ、精神疾患分類の選択に際しての困難さという問題点があった。以上のことから、本稿では精神疾患は伝統的本質主義的な意味での自然種でもHPC的な意味での自然種でもないと結論づける。精神疾患種の存在論的身分について考える際は人間の関心や分類目的、医師の主観的判断等についても考慮するべきであり、ただ世界の因果構造に一致し、法則的一般化や推論の実践を生み出せるかどうかという観点のみから論じるべきではない。精神疾患は自然種という種別概念に当てはまらない存在者であり、精神疾患の種別については別の説明が必要となるだろう。しかし、この結論から精神疾患が我々によって完全に恣意的に作り出された存在者だとすぐさま結論することはできない。本稿第三章で述べた通り、精神医学の営みは統計的処理を施された情報に基づいており、それにより医療実践者の推論は自然のうちに根拠を持ち、或る程度の確からしさを有すると見なされる。このことから、個々の精神疾患は統計的処理に耐える存在であり、我々の思い込みや偏見によってのみ作り出されたものではないと考えられる。つまり、精神疾患は自然種ではないが、自然のうちに全く根拠を持たないものでもないと言えるのだ。ゆえに、精神疾患の種別問題について考える際は、精神疾患が自然種か規約種のどちらかに分類される筈だという両極端な考えを捨てる必要があるだろう。

註

- (1) Kendell, Brockington (1980), p. 324.
- (2) Sneath (1957), p. 187.
- (3) Cross-Disorder Group of the Psychiatric Genomics Consortium (2013), p. 1376.
- (4) 神庭 (2006), pp. 3-4.
- (5) 黒木 (2019), pp. 520-521.
- (6) Ibid, p. 515.

- (7) 国里、片平、沖村、山下 (2019), p. 8.
- (8) 黒木 (2019), p. 515.
- (9) 近藤、池田、岩田 (2016), p. 34.
- (10) Boyd (2010), p. 215.
- (11) それゆえ、ボイドは種名辞の定義はア・プリアオリではなくア・ポストリアオリに発見されるものと主張する。
- (12) 植原 (2013), p. 36.
- (13) 田中 (2012), p. 11.
- (14) *Ibid.*, pp. 38-39.
- (15) 田中 (2012), p. 11.
- (16) Boyd (1991), p. 139.
- (17) この観点は実際の精神疾患の分類においても重要視されており、ケンデル達 (2003) は、精神疾患の分類について考える際に、臨床的経過と治療反応性を予測するという臨床的有用性が重要だと実際述べている。
- (18) P・グリフィスは、物の交換のための手段として貨幣を用いるという社会的慣習と経済における行為者がその効用を最大化しようとするために、貨幣の供給をインフレや利子と結びつけるような貨幣についての法則的一般化が成り立つと主張している (Griffiths (1999), p. 218)。この時、HPC説に則るならば、貨幣についての法則的一般化が成立するのは基礎に因果的メカニズムが存在するからだと考えることができる。
- (19) APA (2014), p. 161.
- (20) 椎野 (2017), p. 42.

参考文献

- American Psychiatric Association, 1952. *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders*. Arlington. American Psychiatric Association.
- American Psychiatric Association, 1968. *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders 2nd ed.* Arlington, American Psychiatric Association.
- American Psychiatric Association, 2013. *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders 5th ed.* Arlington. American Psychiatric Association. (高橋三郎・大野裕 (監訳)・染矢俊幸・神庭重信・尾崎紀夫・三浦将・村井俊哉 (訳)・2014) 『DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル』東京、医学書院)
- Beebe, H, Sabbarton-Leary, N, 2010a. "Are Psychiatric Kinds 'Real'?". *European Journal of Analytic Philosophy* 6 (1): pp. 11-27.
- Beebe, H, Sabbarton-Leary (eds.), N, 2010b. *The Semantics and Metaphysics of Natural Kinds*. London. Routledge.
- Boyd, R. 1991. "Realism, anti-foundationalism and the enthusiasm for natural kinds". *Philosophical Studies* 61: pp. 127-148.
- Boyd, R. 2010. "Realism, natural kinds, and philosophical methods", in Beebe, H, Sabbarton-Leary. (eds.), (2010b): pp. 212-234.
- Cooper, R. 2007. *Psychiatry and Philosophy of Science*. London. Routledge. (伊勢田哲治・村井俊哉 (監訳)・植野仙絃・中尾央・川島敬輔・菅原祐揮 (訳)・2015) 『精神医学の科学哲学』名古屋、名古屋大学出版会)
- Cross-Disorder Group of the Psychiatric Genomics Consortium. 2013. "Identification of risk loci with shared effects on five major psychiatric disorders: a genome-wide analysis". *Lancet*381: pp. 1371-1379.
- Griffiths, P. 1999. "Squaring the circle: natural kinds with historical essences", in Wilson, R. (1999): pp. 209-228.
- Haslam, N. 2014. "Natural Kinds in Psychiatry: Conceptually Implausible, Empirically Questionable, and Stigmatizing", in Kincaid, H, Sullivan, J. A. (2014): pp. 11-28.
- 神庭重信 2006 「ストロンスから精神疾患に迫る：海馬神経新生と精神機能」『日薬理誌128: pp. 3-7.
- Kendell, R. E, Brokington, I. F. 1980. "The Identification of Disease Entities and the Relationship between Schizophrenic and Affective Psychoses". *Brit. J. Psychiatr*137: pp. 324-331.

- Kendell, R. E., Jablensky, A. 2003. "Distinguishing Between the Validity and Utility of Psychiatric Diagnoses". *Am J Psychiatry* 160, pp. 4-12.
- Kincaid, H, Sullivan, J. A (eds.). 2014. *Classifying Psychopathology: Mental Kinds and Natural Kinds*. Cambridge, The MIT Press.
- 近藤健治、池田匡志、岩田仲生、(2016)、「分子遺伝学からみたスペクトラム概念」『精神医学の基盤』pp. 31-40.
- 国里愛彦、片平健太郎、沖村宰、山下祐一、2019、「計算論的精神医学 情報処理過程から読み解く精神障害」東京、勁草書房。
- 黒木俊秀、2019、「DSM時代の終焉と多元主義言説の台頭」『臨床評価』46 (3-4): pp. 513-524.
- 中村勇二郎、1993、「精神科外来を訪れる悲嘆反応」『精神医学』35 (6): pp. 589-596.
- 椎野信雄、2017、「Homosexualityをめぐって」『ホモセクシュアルが病気になるか』文教大学国際学部紀要27 (2): pp. 39-47.
- Sneath, P. H. A. 1957, "Some Thoughts on Bacterial Classification". *J. gen. Microbiol* 17: pp. 184-200.
- 田中泉吏、2012、「微生物と本質主義——種カテゴリーに関する恒常的性質クラスター説の批判的検討——」『科学基礎論研究』40 (1): pp. 9-25.
- 植原亮、2013、「『実在論と知識の自然化 自然種の一般理論とその応用』東京、勁草書房。
- Zachar, P. 2000. "Psychiatric Disorders are Not Natural Kinds". *Philosophy, Psychiatry & Psychology* 7 (3): pp. 167-182.
- Zachar, P. 2015. "Psychiatric disorders: natural kinds made by the world or practical kinds made by us?". *World Psychiatry* 14 (3): pp. 288-290. (九州大学大学院・博士後期課程)